廣讃寺ジャーナル

第158号
（発行所）
真宗大谷派
松岡山 廣讃寺
中村区城屋敷町3-30
TEL(052)411-5301
FAX(052)411-5341
携帯 090-1568-4623
〈E-mail〉
matsuoka@kosanji.or.jp

空過（くうか）

日々の生活での移動距離は十キロ以内で、いつも同じような日々を過ごし、一日が、一ヵ月が、一年が過ぎていく。他人と話す機会はあっても、人と心の底から語り合うことはほとんど皆無である。今日は食べるための行動はしたが、心に響く日を味わっていない。

一日の空過は、やがて一生の空過となる

金子大榮（かねこだいえい）

「空過」とはむなしく過ぎるという意味である。忙しく過ごした、充実した日を過ごしたと満足したとしても、それは清涼飲料水を飲んで一瞬さわやかな気持ちになったのと同じで、またすぐにむなしさにおそわれる。一刻一刻がかけがえのないものでありながら、ただ過ごしてしまう。

では、むなしく過ごさない方法は何かといえば深く考え、何かを思い、そして感じることであろう。

「南無阿弥陀仏」は ご苦労を窺い知るはたらき

田中 智教

浄土真宗において一番大事なことは念仏することといえるでしょう。それは、南無阿弥陀仏と称えることですが、何かの呪文のように思う人も少なからずおられるでしょう。南無阿弥陀仏と称えることを、源信僧都は「唯称弥陀」、それを親鸞聖人が『正信偈』の7字の句作りの中で「唯称仏」という言葉に略して教えてくださっているもの。また、蓮如上人に至っては『御文』の中で繰り返し「称名念仏」と、その肝要なことを教えてくださっています。

その南無阿弥陀仏といえば、阿弥陀仏に南無する―阿弥陀如来に頭が下がるという意味であるものの、その阿弥陀如来に頭が下がるどころか、できれば何者にも頭を下げたくないというのが私たち人間の根性ではないでしょうか。あるいは、頭を下げることはいいけど、その阿弥陀如来が遠い存在で頭を下げる感覚がよくわからないという声もあるかもしれません。

そこで、「南無阿弥陀仏」を別の言い方で示すと「名号」といいます。その名号について『正像末和讃』の最後に以下の言葉が所収されています。

名の字は、因位のときのなを名という。号の字は、果位のときのなを号という。

（『真宗聖典』５１０頁）

因位（いんに）というと法蔵菩薩、果位（かい）といえば阿弥陀仏。法蔵菩薩がご修行時代にすべてのものが救われるこの上ない誓いを建てて、自ら阿弥陀如来となって人びとを照らし続けているという一人の御苦労がある。

そのことを蓮如上人は御文に「弥陀如来の五劫・兆載（ちょうさい）永劫（ようごう）の御苦労を案ずるにも、われらをやすくたすけたまうことの、ありがたさ、とうとさをおもえば」との言葉で教えてくださっています。前述したように、阿弥陀如来が遠い存在と感じるのであれば、まずは死者や先祖の生涯に思いを馳（は）せて、そのご苦労を知ろうとすることが、先人達が称えてきた南無阿弥陀仏のお心に叶（かな）うのではないでしょうか。苦労のない人などいませんし、功績の背景にも必ず苦労があります。そのご苦労を知ることによって、自身の苦労も、ひいては後（こう）世（せい）の苦労も明るい苦労となることを「南無阿弥陀仏」の六字に伝統されてきたのだと受け取りたいと思います。

お仏供（ぶく）

お仏壇に毎日ご飯でお仏飯（ぶっぱん）をお供えしていたのですが、最近はご飯を炊かなくなり代わって朝はパンを食べるようになりました。お仏壇にパンをお供えしてもいいのでしょうか。

通称で「お仏飯」という地域もありますが、公には「お仏供」といいます。お仏飯はそのお供えするお米自体を指す言葉ですね。それで、一般的にいいか悪いかで言えば、それぞれのお寺の御住職のご指導があるでしょうから、ハッキリと明言しにくいですが、パンを毎日食べるということに意味があるように思います。つまり主食を供えるということですね。

伝統的にはご飯が主食であり、お仏飯をお供えしてきましたが、今日の多忙を極める現代人の生活状況などを鑑みると、ご飯を炊かないご家庭も多いようですね。そのお仏供を基本的には正午に下げて頂戴し食すのが慣例であり、仏にお供えする行為を通して与えられた命や恵みを実感し、感謝の気持ちを確認する意味があると思います。その意味において、以前と供えるものが異なれど、毎日供え、毎日感謝することに大きな意味があるように思います。

行事予定

五月二十八日（金）十時　聖人命日のお勤め

コロナウイルスの変異株が全国で猛威を振るおうとしています。今年中に大きな行事が行えるかはあやしくなってきましたが、また再開できそうになりましたらご案内いたします。